

A diagnostic approach for identifying anti-neuronal antibodies in children with suspected autoimmune encephalitis

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2015-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中原, 絵理 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001707

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1610 号

A diagnostic approach for identifying anti-neuronal antibodies in children with suspected autoimmune encephalitis

(自己免疫性機序が疑われる小児脳炎患者における抗神経抗体の解析)

中原 絵理 (なかはら えり)

博士 (医学)

論文審査結果の要旨

本論文は、小児における自己免疫機序が疑われる中枢神経疾患において複数の抗神経抗体の検出法を比較検討したものである。

82 例の小児中枢神経疾患の患児の血清を収集し、その検体を用いてヒト脳蛋白を泳動したメンブレンを用いた immunoblot、ラット凍結脳切片を用いた免疫組織化学法 (IHC) とラット初代培養神経細胞を使用した免疫細胞化学法 (ICC) を施行した。IHC と ICC においては結果に相関が認められ、細胞の核や細胞質、樹状突起に対する抗体を同定することが可能であり、検出法の再現性も認められた。Immunoblot は IHC、ICC との結果との相関は不良であり、非特異的バンドも認められるため陽性の特定が困難であった。今回の結果から IHC と ICC を組み合わせて抗体検出を行うことが自己抗体のスクリーニングに適していることが明らかにされた。

自己免疫性脳炎を疑う小児の中枢神経疾患は数多くあり、その診断法の確立が問題となっており、成人においては IHC や ICC、ELISA などの方法により検出されているが、抗体価の低い小児においても IHC や ICC により抗神経抗体を検出することが可能であることが証明された。

本検討は小児の自己免疫性の機序が疑われる中枢神経疾患において複数の自己抗体検出法を初めて検討し、その検出法の有用性を明らかにした意義ある論文である。

よって、本論文は博士 (医学) の学位を授与するに値するものと判定した。